

## 第13話 新政の失敗

けれども朝臣にすぐれた人が乏しく、頻りに不公平な政治をしたので、  
公家と武家の間に勢力の争いが起こって、ついに護良親王がその犠牲となる。

### 中興政治の不成績

ご即位以来のご理想であった政権の回復を完全に成遂げられると、後醍醐天皇は延喜天曆の御代のよ  
うな善政をこそお布きになろうと頗る熱心に政治に励ませられたが、これを輔ける朝廷の役人にすぐれ  
た人が乏しく、且つ公卿達は、久しく政治の実際に與らなかつたので、今度、彼らが俄かに重い役目に  
就いても、実際の政治の上の素養もなければ手腕もなかつたので、勢い事務は滞り、裁決などにして  
も不公平な事が多かつた。そのために、後には次第に怨みを抱く者が多く現れて来た。

### 恩賞の不公平

いや、恩賞が偏頗で不公平でした事は後々の事を待つまでもなく、前に挙げた諸将の恩賞を見て  
も分かります。終始勤王の為に尽して誰が見ても第一の功劳者であるべき管の楠木正成が、足利尊氏や  
新田義貞よりも下で、ただ六波羅を落としたのみの尊氏が外にはさして功劳も無かつたのに、勲功第一と  
認められたのは不思議です。尤も、尊氏はその家柄からいえば源氏の名族で、関東では殊に名望が高  
かつたのですから、若し二心でも抱いて、頼朝の真似でもされては面倒だのご用心から、特にその恩  
賞を重くされたのであつたかも知れません。それで、尊氏の事だけは姑く措くとしても、此の時の恩賞  
にはこの外にもまだ同じような偏頗なことが少なくなかつたのです。

例えば、勤王の軍に加わつた武士で相当の功劳のあるにも拘らず、その者には恩賞が極めて薄く、  
これに反して、中興の業に全く何の功はなくとも、公卿達は重い恩賞を賜つたことなどもその一つで  
す。現に赤松則村の如きは、最も早く義兵を挙げて京都の回復にはその功の多かつた1人ですから、  
志貴山に護良親王をお迎えして京都に上つた後に、播磨の守護職を授けられたが、間もなく、何の罪もな  
いのこれを取り上げられて、同国の佐用という一荘のみを賜つた。これが則村を賞する道を誤つ  
たものである事は明らかですが、こういう目に遭つた者は外にも頗る多かつたのです。

それに、この頃の武士は、正成や長年のような初めから深い忠義の心を持った者ばかりではなく、恩  
賞を目的に天皇のお身方に参つた者も多かつたのですから、それらの武士は、恩賞のあまりに偏頗で不当な  
のを見て不平を懐き、こんな事なら寧ろ元の幕府のほうがよかつたとさえ思うようにもなつて来ました。

### 朝臣の認識不足

実際、朝廷の役人達の中には、今度、北條氏を倒して政権を取戻したのを、自分らの手柄であるかの  
ようにばかり考へて、実際に働いた武士の力を忘れた者もいたし、また、これまでの武家の勢力に懲  
りてわざとこれを抑えようとした者もありました。それやこれやで、武士の不平は次第に大きく重なり積

もって行って、ついには、<sup>きかい</sup>機会さえあれば<sup>ばくはつ</sup>爆発しそうになって来ました。この有様を見て謀反を企てたのが<sup>あしかがたかうじ</sup>足利尊氏です。

### <sup>あしかがたかうじ やしん</sup>足利尊氏の野心

<sup>あしかが</sup>足利氏が<sup>にった</sup>新田氏と同じく<sup>しそん</sup>源氏の子孫であることは既に前に述べました。<sup>すで</sup>新田氏の<sup>せんぞ</sup>先祖の<sup>よししげ</sup>義重は<sup>こうづけのくにに</sup>上野国<sup>ごおり</sup>新田郡に住んだので<sup>す</sup>新田氏を名乗り、<sup>な</sup>足利市の<sup>よしやす</sup>先祖の<sup>しもつけのくに</sup>義康は<sup>あしかが</sup>下野国の足利に住んだので<sup>な</sup>足利を名乗りました。それで、<sup>お</sup>両氏共に<sup>めいぞく</sup>関東に於ける<sup>こと</sup>源氏の名族でしたが、<sup>たお</sup>殊に<sup>ふた</sup>足利氏は、前にも述べた通り、<sup>せいりよく</sup>勢力が強く<sup>つよ</sup>名望も<sup>めいぼう</sup>高かったので、<sup>たか</sup>北條氏の下に立つことを<sup>した</sup>不快に思い、<sup>ふかい</sup>いつかはこれを<sup>おも</sup>倒して<sup>たお</sup>再び<sup>ふた</sup>源氏の世に復そうと望んでいました。<sup>げん</sup>現に<sup>たかうじ</sup>尊氏の<sup>そふ</sup>祖父の<sup>いえとき</sup>家時の<sup>ごと</sup>如きは、「わが<sup>いのち</sup>生命を<sup>ちち</sup>縮めて、<sup>てんか</sup>子孫三代のうち<sup>と</sup>に<sup>はちまんぐう</sup>天下を取らしめたまえ」と<sup>い</sup>八幡宮に<sup>じさつ</sup>祈って自殺したとさえいわれている。

ですから、<sup>たかうじ</sup>尊氏が<sup>さき</sup>先に<sup>みかた</sup>天皇のお身方になったのも、<sup>まこと</sup>真の<sup>ちゆうぎ</sup>忠義の心からではなくて、<sup>きんのう</sup>一時勤王の軍に加わって<sup>たお</sup>先づ<sup>しか</sup>北條氏を倒して、<sup>あと</sup>然る後に、<sup>よりとも</sup>自分が<sup>やしん</sup>頼朝のように<sup>やしん</sup>将軍になろうとの野心からであったとも見られるのです。<sup>しのむらはちまん</sup>彼が<sup>ぎへい</sup>篠村八幡で<sup>あ</sup>義兵を<sup>みつし</sup>挙げると共に、<sup>へい</sup>諸国の<sup>つ</sup>源氏に<sup>みつし</sup>密使を送って<sup>へい</sup>兵を<sup>つ</sup>募ったのを見てもその一端は<sup>いったん</sup>窺われますが、<sup>うかが</sup>更に<sup>さら</sup>六波羅が<sup>ろくはら</sup>陥った時に、<sup>おちい</sup>直ぐに<sup>す</sup>北條氏の<sup>ろくはら</sup>六波羅府をそのまま<sup>あ</sup>足利氏の<sup>ぶぎょうしょ</sup>奉行所として、<sup>たんだい</sup>六波羅探題の<sup>おこな</sup>行った<sup>とお</sup>通りの<sup>こと</sup>事を行い、<sup>おこな</sup>京都の<sup>じんしん</sup>人心を<sup>しづ</sup>鎮め、<sup>も</sup>地方の事にも<sup>も</sup>彼の名を以って<sup>めいれい</sup>命令を下したというのは、<sup>くだ</sup>全くその時の<sup>とき</sup>事情に<sup>じじょう</sup>適した<sup>てき</sup>処置であったとはいえ、<sup>しよち</sup>天皇のお許しをも<sup>ゆる</sup>待たずにこれを<sup>やしん</sup>行ったところに<sup>あと</sup>彼の<sup>うかが</sup>野心の痕がありありと<sup>うかが</sup>窺われるのであります。

いやそればかりではありません。<sup>せ</sup>鎌倉を<sup>お</sup>攻め<sup>あき</sup>落としたのは明らかに<sup>にった</sup>新田<sup>よしさだ</sup>義貞<sup>てがら</sup>でして、その<sup>だれ</sup>手柄は<sup>だれ</sup>誰も<sup>うたが</sup>疑う者はないのですが、<sup>たかうじ</sup>尊氏は<sup>あくらつ</sup>悪辣にも<sup>じじつ</sup>事実<sup>お</sup>に於いての<sup>こう</sup>その<sup>うば</sup>功を<sup>よしさだ</sup>奪い、<sup>お</sup>鎌倉から<sup>お</sup>義貞を<sup>だ</sup>追い出したので<sup>やしん</sup>す。自分が<sup>こんきよ</sup>天下を取るには、<sup>お</sup>鎌倉に<sup>やしん</sup>根拠を置かねばならぬと思ったからであって、<sup>やしん</sup>彼の野心はここにも<sup>うかが</sup>明らかに<sup>うかが</sup>窺われます。

しかし、<sup>よしさだ</sup>どうして<sup>こう</sup>義貞の<sup>うば</sup>功を<sup>ついで</sup>奪ったというのでしょうか？<sup>の</sup>その<sup>お</sup>わけを<sup>お</sup>序に述べて置きます。

### <sup>たかうじ</sup>足利尊氏の子の<sup>せんじゅおう</sup>千壽王

<sup>はじ</sup>初め<sup>たかうじ</sup>足利尊氏は、<sup>ほうじょう</sup>北條<sup>たかとき</sup>高時の<sup>めい</sup>命を受けて<sup>のぼ</sup>京都に上ろうとした時に、<sup>そむ</sup>すでに<sup>けっしん</sup>北條氏に<sup>そむ</sup>叛く<sup>けっしん</sup>決心をして<sup>い</sup>いたので、<sup>いちぞくろうとう</sup>一族郎等は<sup>さいじよ</sup>いうに<sup>おきな</sup>及ばず、<sup>こ</sup>妻女や<sup>ことごと</sup>幼い<sup>ひ</sup>子ら<sup>つ</sup>までも、<sup>たかとき</sup>悉く<sup>たかとき</sup>引き連れて<sup>たかとき</sup>立とうとした。<sup>たかとき</sup>執権<sup>たかとき</sup>高時は<sup>あや</sup>それを知って<sup>たかうじ</sup>怪しく<sup>せいしよ</sup>思い、<sup>さ</sup>尊氏に、<sup>だ</sup>出陣に<sup>さいじよ</sup>先立って<sup>さいじよ</sup>誓書を<sup>さいじよ</sup>差し出すようにと<sup>さいじよ</sup>求めた上に、<sup>さいじよ</sup>その<sup>さいじよ</sup>妻女と<sup>さいじよ</sup>子<sup>さいじよ</sup>の<sup>さいじよ</sup>千壽王 -- <sup>のこ</sup>後の<sup>せま</sup>義詮 -- <sup>せま</sup>を<sup>せま</sup>人質として<sup>せま</sup>鎌倉に残すようにと<sup>せま</sup>迫ったのです。

<sup>たかうじ</sup>尊氏もこれには<sup>こころ</sup>心が<sup>まよ</sup>迷ったが、<sup>そむ</sup>今ここで<sup>み</sup>北條氏の<sup>あぶ</sup>命に<sup>あぶ</sup>背いては<sup>あぶ</sup>自分の<sup>あぶ</sup>身が<sup>あぶ</sup>危ないからと、<sup>あぶ</sup>すべてを<sup>あぶ</sup>承諾して<sup>あぶ</sup>出発した。<sup>あぶ</sup>この時、<sup>あぶ</sup>千壽王は<sup>あぶ</sup>4才でしたが、<sup>あぶ</sup>父の<sup>あぶ</sup>尊氏が<sup>あぶ</sup>丹波の<sup>あぶ</sup>篠村で<sup>あぶ</sup>義兵を<sup>あぶ</sup>挙げると<sup>あぶ</sup>間もなく、<sup>あぶ</sup>家来に<sup>あぶ</sup>連れられて<sup>あぶ</sup>鎌倉を<sup>あぶ</sup>遁れ、<sup>あぶ</sup>新田<sup>あぶ</sup>義貞が<sup>あぶ</sup>上野に<sup>あぶ</sup>義兵を<sup>あぶ</sup>挙げて<sup>あぶ</sup>武蔵国まで<sup>あぶ</sup>進んだ時に、<sup>あぶ</sup>200騎ばかり<sup>あぶ</sup>の手勢を<sup>あぶ</sup>率いて<sup>あぶ</sup>義貞の<sup>あぶ</sup>軍に加わった。<sup>あぶ</sup>その後、<sup>あぶ</sup>関東の<sup>あぶ</sup>武士が<sup>あぶ</sup>陸続と<sup>あぶ</sup>義貞の<sup>あぶ</sup>軍に<sup>あぶ</sup>馳せ<sup>あぶ</sup>集まって、<sup>あぶ</sup>首尾よく<sup>あぶ</sup>鎌倉を<sup>あぶ</sup>攻め<sup>あぶ</sup>落としたことは既に述べた通りです。

### <sup>たかうじ</sup>足利尊氏、<sup>よしさだ</sup>新田義貞の<sup>こう</sup>功を<sup>うば</sup>奪う

ところが、鎌倉が陥り、北條氏が亡びた後に、京都から尊氏の家来の細川和氏、同頼春、同師氏の兄弟3人が鎌倉に下って千壽王を補佐するようになると、関東の武士の多くは、もとより足利氏の威名に復していた上に、今度、京都で、足利尊氏が勲功第一と認められ、天皇から特別のご信任をうけているという評判を聞いたので、殆ど皆新田義貞から去って千壽王の配下に属したのです。こうして、千壽王は、自然と北條氏の後を承けて関東の支配者になったので、細川和氏らの兄弟は、千壽王の名で関東にさまざまの命令をも下して、義貞もこれに従がわせようとなりました。

折角の手柄を他人に奪われてしまった義貞の不満はいうまでもないことだったでしょうが、いかにせん、足利氏の勢力はいよいよ盛んであって、迎も新田氏の及ぶところではなかったもので、義貞は恨みを呑んで、遂に一門を率いて京都に上ったのでした。

実際、以上の事実を表面だけから見ると、鎌倉を攻め落とすのに大将となって戦った者は義貞ですが、彼に率いられて行った者共は皆千壽王の名の下に集まったのですから、その功は当然足利氏に在るというようにもとれます。尊氏は巧みにこれを宣伝させて、広く一般の者にそう思わせた。

こうして、彼は京都に於いては自ら六波羅の後継者となって奉行所を開き、鎌倉に在っては子の千壽王に北條氏の後継者となって権威を振るわせたのです。彼が天下の政権をその手中に収めようとしていた事はこれでも分かるのであります。

ところが、中興の業の成就と共に、名義だけでもせよ、征夷大將軍には護良親王が任ぜられたので、尊氏がその望みを達するには、先づ親王を除かなければならないことになった。彼が密かにその機会をねらっていたのはいうまでもありません。

#### 護良親王のご計画

一方、護良親王もまた、尊氏の野心を疾うからお気づきになっておられたので、天皇に申し上げて、早くこれをお討ちになろうとまでされたのですが、天皇は、漸く戦乱が止んだばかりなのに、尊氏のような勢力のある者を討とうとすれば、再び天下が乱れることにもなる虞があるとおぼしめし、これをお許しにならなかった。しかし天皇とても、尊氏を全くは信用していない事は、表面では尊氏を優遇されながら、裏面ではこれを抑えよう抑えようとされたのでも分かります。尊氏の弟の直義を相模守として鎌倉に下らせ、成良親王を補佐して関東を鎮めさせる前に、北畠顕家を陸奥守として奥州に下らせて、義良親王を奉じて出羽奥州を治めさせたのなども、東国における足利氏の勢力を二つに分けんがためのご計画であったのです。

しかし、そういううちにも、尊氏の野心は次第にはっきりと分かかって来たので、護良親王は今では棄てておけないと考えられて、密かに兵を集めて尊氏を除こうとなされた。

#### 護良親王の失脚

ところが、足利尊氏は、予ねてから護良親王の御挙動に目をつけていたので、どうしてこれを見逃さうか。良い機会が来たとばかりに、天皇に、「親王は謀反をなさろうと兵を集めておられます」と讒言を

## 第13話 新政の失敗

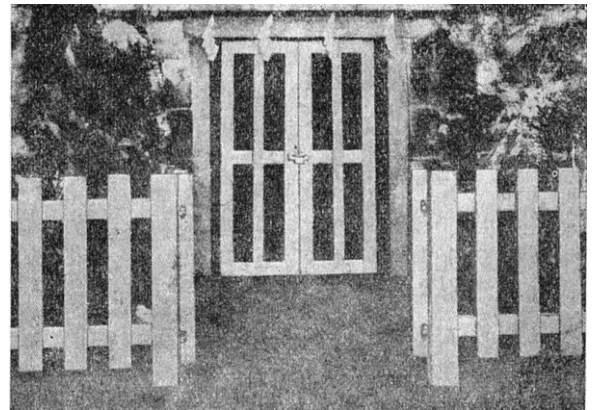
申し上げた。天皇は、もとより親王の御心をご存知なので、これは非常にお困りになったが、こう事があらわれてしまった上は、仕方がないので、ともかくも一時は罪を親王に負わせて置いて、後にまたお救いになろうとの考えで、親王が宮中にお出になったところを武士に命じて捕えさせ、やがて鎌倉に送られた。時に建武元年11月でした。すると、尊氏の弟の直義は、無法にも二階堂が谷に土牢を掘って、其中に親王を押込め奉った。

### 北條時行の乱

これより先、元弘3年の冬の頃から、北條氏の残党は諸国に乱を起こしたが、建武2年7月の初め、北條高時の次男時行を大将として信濃の諏訪に起こった一軍は殊に勢いが強く、連戦連勝で武蔵に入り、遂にその月の末には鎌倉に迫ってこれを奪い返そうとした。足利直義は諸将を遣って方々にこれを防がせたが、皆時行の軍に破られたので、終に自ら兵を率いてこれを迎え撃った。ところが、直義もまた大いに敗れたので、成良親王を奉じて鎌倉を逃げ出したが、その時、彼は北條時行が鎌倉に入って護良親王を奉ずることを恐れて、家来の淵辺義博という者に命じて護良親王を殺させた。

### 土牢の内の護良親王

淵辺義博は直義の命を受けると途中から引き返して土牢に参り、お迎えに参った由を申し上げると、折から親王は灯火の下で御経を読んでおられたが、義博の怪しげな顔色をきつとご覧になって、早くもそれとお察しになり、「その方は我を殺しに来たのであろう、よし、参れ！」とばかりに身を起こして、踊りかかって義博の太刀を奪おうとなされた。



かまくら つちろうあと  
鎌倉の土牢址

義博は持った太刀を取り直してお膝のあたりを強く打ち奉る。親王は久しく土牢の中に坐ってばかりおられたので、御足も思うようには立たなかつたのであろう、思わず俯伏に打ち倒されて、起き上がるうとなさるところを義博が乗懸って、刀を抜いて、お頸を搔こうとしたので、親王はお頸を縮めて、刀の切先をおくわえになった。

### 護良親王のご最後

義博は大いにあわて、刀を奪われまいと強く引くと、刀の切先が1寸ばかり折れた。義博はその刀を投捨て、脇差を抜いて、先づ御胸元のあたりを刺して、親王のお弱りになったところを、御髪をつかんで引き上げて、終に御首を掻き落した。時に親王は28才であった。義博は土牢の外に走り出て、明るいところで御首を見奉るに、噛切られた刀の切先がまだお口の中に留まって、お眼もなお生きた人の如くでしたので、恐ろしさの余り、傍らの藪の中に投捨てて帰って行った。

牢内にお付き申した女官は、この有様を見奉って、あまりの恐ろしさと悲しさとに身もすくみ、手足も立たずにいたが、暫くしてから漸く心を静めて立出で、藪に捨てられた御首を取上げて見るに、御肌

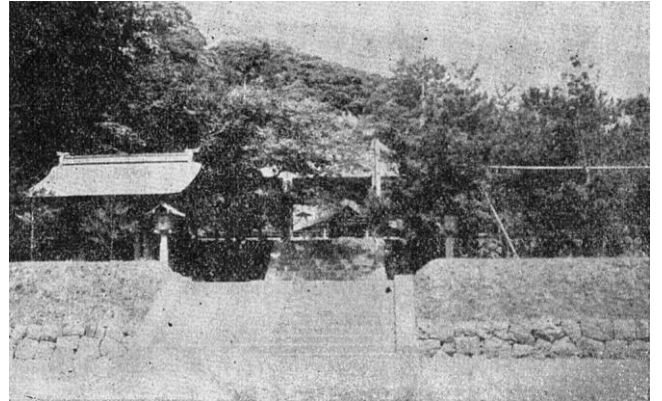
### 第13話 新政の失敗

はまだ冷えず、御目をも塞いでおられない。若しや夢ではないかと思っただけでしたが、もとより夢ではなかったもので、泣く泣く坊さんに頼んで、お葬式を営んで、自分は髪を落として尼となり、都に上ったということです。

護良親王が建武の中興に大きな手柄のあった事は既にたびたび述べた通りであります。この中興の新政が、恩賞の不当などから武士に不平を懐かせたので、公家と武家との間に勢力の争いが起こり、親王はその犠牲となられて、ついに長くも逆心の手に罹られる事になったのであります。親王がお薨れになると、公家の勢力は目に見えて墜ち、武家の勢力のみが盛んになって、間もなく尊氏の謀反が事実となって現れました。

#### 鎌倉宮

今、鎌倉に在る官幣中社鎌倉宮は、護良親王を祀った社で、明治2年、明治天皇が特に勅して、建てさせられたものです。その社の後方には土牢が残っている。口は狭いが中は広く、下の方の開いた土窟で、親王を押込め奉った処だと言伝えられています。また、2、3町隔てた山の頂には親王のお墓があります。



鎌倉宮

( 第13話 新政の失敗 終わり。 次は前頁に戻り、第14話 足利尊氏の謀反 へ )